

出エジプト記12章1-28節 「過越の羊なるキリスト」

1A 過越の食事 1-14

1B 子羊の用意 1-5

2B 肉の食事 6-11

3B 過ぎ越すさばき 12-14

2A 種なしパンの祝い 15-20

3A 血に守られる家 21-28

1B 血を見て入らない裁き 21-24

2B 子どもへの継承 25-28

本文

出エジプト記 12 章を開いてください。私たちは、聖書通読の学びをしていて、先週で 11 章まで来ました。いつもは午後の礼拝で、一節ずつ見ていきますが、今朝は、12 章の前半、1-28 節を一節ずつ見ていきたいと思います。

復活祭、イースターが近づいています。教会の暦では、今年は 4 月 5 日です。主が、死者の中からよみがえられるのですが、その死は、ローマの十字架刑という極めて惨いもので、しかも、大通りに、ほとんど全裸の姿で磔にされますから、屈辱に満ちたものでした。その道、十字架への道を主は歩まれました。しかし、それが、天地を造られた神の永遠の計画によれば、すべての人が犯した罪のために身代わりになるためなのです。

私たちは、出エジプト記をここまで見てきましたが、エジプトの王、ファラオが、度重なる災いをもってしても、イスラエルの民が出て行くのを拒みました。けれども、最後の災いにおいて、そのファラオが、強いらせてでも、イスラエルの民を出させるようになります。それが 11 章で見ましたが、すべての長子、つまり長男を打つということです。また、家畜は雄の初子です。

当時の人々にとって、長子とは、自分のすべてを受け継ぐ者であり、自分の分身とも言えます。主は、イスラエルの民をご自身の長子のようにみなし、愛しておられました。それを出させないとすると、では、あなたの長子、息子を殺すと言われました(4:23)。このことを持って、事実、主はエジプトの長子をみな殺します。そして、あれだけ強情だったファラオが、手放すことになります。

イスラエルに対して主が行われたことは、永遠のご計画で、すべての人に対して行われることの雛形になっています。それはすなわち、ご自分の長子、独り子を犠牲にすることで、世のものとされて、悪魔の奴隷とされている世界を裁き、解放して、ご自分のものとされるということです。「コロ

1:13-14 御父は、私たちが暗闇の力から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。14 この御子にあって、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです。」

これから、子羊を家々で屠って、その血を門のところにあてがって、その肉を食べて、それで、エジプトから出て行くという、実に奇妙な儀式を行うように命じられている部分を見ます。それが、後にご自身が遣わす、キリストのなさるわざを指し示していることがわかれば、その真意が明解になります。キリストが、どのように過越の子羊となられるかを見ながら、読んでいきたいと思えます。

1A 過越の食事 1-14

1B 子羊の用意 1-5

¹ 主はエジプトの地でモーセとアロンに言われた。²「この月をあなたがたの月の始まりとし、これをあなたがたの年の最初の月とせよ。

主がお定めになった正月、第一の月は「アビブ」と言います、13 章 4 節に出てきます。後にバビロンの名前でニサンとも呼ばれるようになります。アビブとは、「麦の穂」という意味で、大麦が熟れて来る時期になります。これが宗教における正月であります、その他にユダヤ暦では一般的な正月もあり、それがロシュ・ハシュナと呼ばれて、ラツパを吹き鳴らす日です。9 月にあります。

しかし、このアビブの月から新しい年が始まります。主が、これから行われることによって、イスラエルの民は、いわば新しくされます。エジプトから解放されて、新たな道を歩みます。キリストにあって、私たちが新たな歩みをするのと同じです。

³ イスラエルの全会衆に次のように告げよ。この月の十日に、それぞれが一族ごとに羊を、すなわち家ごとに羊を用意しなさい。

祭りは、第一の月の「十日」に行われます。十は、主がさばきを行われることを、しばしば示す数字です。これから、エジプトに対してさばきを行われます。その時に、犠牲となる羊を用意します。ここで、私たちが目を向けなければいけないのは、「棕櫚の聖日」です。棕櫚とは、ヤシの一種ですが、それを持って、オリブ山で、ろばの子に乗られてイエスがエルサレムに入城されたことを、覚える日です。十字架に付けられる前の日曜日、受難週の始まりです。

当時は、エルサレムの近郊の町、ベツレヘムにて、過越のための羊が育てられていました。クリスマスのお話で、羊飼いたちが夜番をしていたとありますが、まさに彼らは、過越の羊を飼っていました。その十日の日になって、神殿へ羊が連れて来られて、調べられて、十四日に屠られます。イエスご自身も同じように、エルサレムに十日に入られて、その最後の週、宗教指導者たちに、いろいろな尋問を受けて、それに答えられました。

そして、これは家ごとに祝われるものです。家を単位にして、主がイスラエルをエジプトから救い出されたことを覚えます。ですから、私たちは家族を大事にするように教えられ、信仰を家族で継承することも、教えられます。さらに、教会自体が霊的に、神の家族です。私たちは、ともに過越の羊と呼ばれるキリストを覚えるのです。

⁴ もしその家族が羊一匹の分より少ないのであれば、その人はすぐ隣の家の人と、人数に応じて取り分けなさい。一人ひとりが食べる分量に応じて、その羊を分けなければならない。

祭りにおいては、だれも不足する人がいないことが注意されています。いけにえを献げることに、事欠いている人々にも分け与えることが、後に律法の中でも定められます（例：申命 26:13）。ダビデも後に、アマレク人からの分捕り物を、戦いには加わらなかった者たちにも平等に分け合っています。恵みを受けたら、分け隔てなく与えるのです。この原則をパウロは、教会にも適用して、「2コリ 8:14 今あなたがたのゆとりが彼らの不足を補うことは、いずれ彼らのゆとりがあなたがたの不足を補うことになり、そのようにして平等になるのです。」と言いました。

⁵ あなたがたの羊は、傷のない一歳の雄でなければならない。それを子羊かやぎのうちから取らなければならない。

ここで、強調されているのは、「傷のない」ということです。主が受け入れられるのは、欠陥や傷や、しみのないもの、完全なものであるということです。ものでなければいけません。なぜなら、神は完全なもののみを受け入れるからです。不完全なものは、ご自分が完全なので受け入れることができません。

ここで、多くの人が「自分は頑張れば、神に受け入れられるに違いない」として、自分の努力で神に近づこうとします。しかし、アダムの子、アベルとカインを見れば分かるように、羊の犠牲を献げた、アベルのを神は受け入れ、カインの育てた、土地からの作物を受け容れられませんでした。献げるべきものは、自分の頑張りではないのです。むしろ、自分の頑張りもすべて含めて、自分取るに足りない者として、高ぶりを捨てて、ありのままを差し出すことです。

神はすでに、完全ないけにえをご自身で用意されていました。それが、私たちの救い主イエスキリストです。この方は、肉体を持っていたので人間の弱さは持っていましたが、罪に屈することはありませんでした。死刑判決を受ける時、また十字架に磔にされた時、すべての人がこの人には罪がないと証言しました。このいけにえを、自分がへりくだって受け入れることが必要です。

2B 肉の食事 6-11

⁶ あなたがたは、この月の十四日まで、それをよく見守る。そしてイスラエルの会衆の集会全体は

夕暮れにそれを屠り、⁷その血を取り、羊を食べる家々の二本の門柱と鴨居に塗らなければならない。

十日に選ばれた羊は、よく見守られます。傷、しみなどがいないか調べられます。そして、十四日の夕暮れに屠りますが、夕暮れなので正確には、この時点で十五日に入ります。

イエスは、棕櫚の聖日にエルサレムに入城され、そして十四日を過ぎた十五日に、十字架につけられました。その間、宗教指導者から試されるような質問を受けられました。カイサルに税を収めるのは、律法にかなっているのか？などです。主は、相手が何も言えなくなるような答えを出されました。メシアには値しないという欠けが見当たらなかったのです。そして、その間、捕らえられることはありませんでした。

そして、その血を、羊を食べる家々の門柱と鴨居につけます。鴨居とは、門の上の部分の柱です。そして、あとで死の使いがやって来て、それぞれの家に入り、長子を殺していくのですが、この血があてがわれているところは、過ぎ越すのです。

当時の人々にとって、これが一体、何を意味するのか、分かりようもありません。しかし、主が言われているということで、信仰をもって行いました。私たちも、主の言われたということだけで、はい、わかりましたという心が必要です。

けれども、キリストが来られた今、イエスが行われたことを指し示していることが分かります。イエスが、そのからだに裂かれ、また血を流されましたが、その血の注ぎを受けた者こそが、神のさばきを免れるからです。「Ⅰペテ 1:18-19 ご存じのように、あなたがたが先祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、¹⁹ 傷もなく汚れもない子羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」

ところで、家の門柱と鴨居には血が塗りなさいと言われているのに、敷居にはなぜ塗るように命じられていないのか？その答えは、血を踏みにじるという意味合いが出てきてしまうからです。「ヘブ 10:29 まして、神の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものと見なし、恵みの御霊を侮る者は、いかに重い処罰に値するかが分かるでしょう。」キリストの流された血が、何の意味があるのか？とないがしろにする者がいれば、その者は神の重い処罰を受けます。

⁸ そして、その夜、その肉を食べる。それを火で焼いて、種なしパンと苦菜を添えて食べなければならない。

主を覚えるのは、食べることによってです。食べて、腹の中に入れることによって、出エジプトが、

そのまま自分たちのものになるのです。主は、この過越の食事の時に、パンを裂いて、「取って食べなさい」と言われました。ご自分の裂かれるからだを覚えるためです。

ここで、火で焼いた子羊を食べます。そして、種が入っていないパンを食べます。種なしパンの祝いの第一目にもなります。そして「苦菜」を食べます。これは、エジプトの奴隷の辛苦を思い出すためにしています。我々キリスト者にとっては、罪による苦々しい思い出を表しているでしょう。

⁹ 生のままで、または、水に入れて煮て食べてはならない。その頭も足も内臓も火で焼かなければならない。

火は、神のさばきを示しています。「ヘブ 12:29 私たちの神は焼き尽くす火なのです。」血を流され、そして火で焼かれ、それを食べるということは、神の罪に対する怒りが血を流すことによって宥められ、そして御怒りにある火があり、その身代わりになった肉を私たちが食することを意味します。主が、十字架の上で「神よ、神よ、なぜ、わたしをお見捨てになったのですか」という訴えは、まさに、神の御怒りをご自身が受けているからこそ、出てきた言葉です。

¹⁰ それを朝まで残してはならない。朝まで残ったものは燃やさなければならぬ。

どうして、残していけないのか？もし残したら、燃やさないといけません。その時に、ただ一度だけ食べることに、意味があるからです。この子羊の流された血と、その肉にあって、イスラエルの民は、永遠にその救いが憶えられて、終わりの時まで覚えられます。つまり、永遠の救いが保障されています。

私たちの主イエスは、ただ一度、その血が流されたことによって、永遠の救いが保障されます。「ヘブ 9:26 しかし今、キリストはただ一度だけ、世々の終わりに、ご自分をいけにえとして罪を取り除くために現れてくださいました。」私は、どうして今、この時に、イエスが十字架につけられなかったのか？とすることがありました。はるか二千年前のことを思い出して、どうして、今の自分の救いが与えられるのか？とと思いました。けれども、それは、それが何回も繰り返されるような効力の薄いものではなく、永遠の救いをもたらす力があることを示しています。だから、二千年前のことであっても、今も、そして永遠の先まで、いつまでも救いをもたらすものなのです。

¹¹ あなたがたは、次のようにしてそれを食べなければならない。腰の帯を固く締め、足に履き物をはき、手に杖を持って、急いで食べる。これは主への過越のいけにえである。

過越の食事は、落ち着いてゆっくり食べるものではないですね。ちょうど、通勤前に駅のそば屋で、食事を済ませるような、急いで行うものでした。それは、ファラオが急いでイスラエル人を追い

出すため、ゆっくり食べる時間がないからです。「腰の帯を固く締める」のは、当時の衣服は、一枚のつぎあわせた布によってできており、裾をまくりあげないと動きづらからです。

3B 過ぎ越すさばき 12-14

¹² その夜、わたしはエジプトの地を巡り、人から家畜に至るまで、エジプトの地のすべての長子を打ち、また、エジプトのすべての神々にさばきを下す。わたしは主である。

主は、この長子を殺すということで、最後のさばきとされます。これまで、ここにあるように「エジプトのすべての神々」にさばきを下しておられました。ナイル川を血にするところから始まり、すべてエジプトで神々とおがまれているものに対してさばきを行われました。そして自分の長子というものが、自分の相続者であり、自分の分身のような存在であり、ファラオにとっては、ファラオ自身が神として拝まれているので、その長子は神の子のような存在で、殺されることは、エジプトの神体系のすべてが殺されることになります。

¹³ その血は、あなたがたがいる家の上で、あなたがたのためにしるしとなる。わたしはその血を見て、あなたがたのところを過ぎ越す。わたしがエジプトの地を打つとき、滅ぼす者のわざわいは、あなたがたには起こらない。

ここが、「過越の祭り」の名前が来たところです。滅ぼす者が、さばきのためにエジプトの家々に入ります。けれども、屠られた子羊の血があてがわれているのを見たならば、そこを過ぎ越すのです。主からのさばきに対して、血によって免れるということを意味します。

そこで、何が問題にされているのか？それは、「血の塗られた家にいるか、どうか？」なのです。自分が何をしているか？ではなく、主の言われた通り、その流された血の中にいるかどうか、だけが、さばきを免れる、唯一の理由になります。主の流された血が、私たちに注がれているかどうか、問われているのです。「I ペテ 1:2a 父なる神の予知のままに、御霊による聖別によって、イエス・キリストに従うように、またその血の注ぎかけを受けるように選ばれた人たちへ。」

ですから、黙示録において、神が終わりの日に、地上に下す災いにおいて、天において出てこられるイエスは、「屠られた子羊」なのです(5:6)。そして、天のエルサレムにおいて、その中に入っている者たちがいますが、最後の最後まで「子羊」と呼ばれていて(22:1)、その都の中において、住民は安全なのです。私たちが何をしているのか？ではなく、「どこにいるのか？」なのです。この私に、私の罪を清めるために、キリストが血を流してくださったのだということを知っていることが、自分を救っているのだということを知ってください。

¹⁴ この日は、あなたがたにとって記念となる。あなたがたはその日を主への祭りとして祝い、代々

守るべき永遠の掟として、これを祝わなければならない。

この日は、後のイスラエルの歴史で繰り返されることはありません。けれども、この日に主がイスラエルを救われたことを、主ご自身が覚えておられて、イスラエルを見捨てることなく、終わりの日まで責任をもって、彼らを救われます。終わりの日に患難がありますが、そこから救い出し、イスラエルを完成させ、御国の中に入れてくださるのです。

だから、イスラエルの民は、今に至るまでこの日を守っています。この時期になれば、アメリカでもスーパーマーケットに、イースターの商品の横に、パスオーバー、過越の祭りの商品が並びます。そして、それぞれの家庭で過越の食事を楽めます。子どもが大活躍します。こうやって、自分たちが神の贖われた民であることを覚えているのです。

キリスト教会がキリスト教会たらしめているのは、キリストが私たちを愛して、血を流して、いのちを捨ててくださったことです。だから、私たちも、事ある毎に、パンを裂いて食べる時に、このかたを覚えます。この方のからだか、むち打ちで引き裂かれたことを覚えます。私たちが、罪から癒されるためです。また、肉体のからだか癒されるためです。そして、血が流されるのは、私たちの罪の清め、赦しのためであり、新しい契約、御霊によって新しくされるという契約が結ばれるためです。主はこのことを、約二千前に成し遂げてくださいましたが、今も覚えているのです。

2A 種なしパンの祝い 15-20

¹⁵ 七日間、種なしパンを食べなければならない。その最初の日に、あなたがたの家からパン種を取り除かなければならない。最初の日から七日目までの間に、種入りのパンを食べる者は、みなイスラエルから断ち切られるからである。

ここから、過越の祭りと一緒に祝われる、「種なしパンの祝い」の教えがあります。十四日の夕暮れに子羊を屠って、そのまま十五日になります。そこから過越の食事が始まります。その日を第一日目とします。それから七日間、毎日、種なしのパンを食べます。

パン種とは、パンの粉を膨らますイースト菌のことです。それが無いパンなので、ほとんどクラッカーのような形状です。私たちは聖餐式の時に、マツアと呼ばれる、ユダヤ人の人たちが使っている種なしパンを使って、聖餐にあずかっています。

¹⁶ また最初の日に聖なる会合を開き、七日目にも聖なる会合を開く。この期間中は、いかなる仕事もしてはならない。ただし、皆が食べる必要のあるものだけは作ることができる。

完全な安息を守ります。他の祭りでもそうですが、仕事をしてはいけないという強い戒めがあり

ます。なぜか？それは、主が行われたことを祝うためです。私たちが何かを行って、それで神が何かをしてくださった、ではなく、まったく一方的に主が行われたことを、その恵みを受け入れるのです。これが礼拝の姿です。私たちは立ち止まらないと、主が行われていることを認めることができないのです。事は、自分たちが動いていることではなく、主が動いてくださっていることによって、成り立っているからです。

¹⁷ あなたがたは種なしパンの祭りを守りなさい。それは、まさにこの日に、わたしがあなたがたの軍団をエジプトの地から導き出したからである。あなたがたは永遠の掟として代々にわたって、この日を守らなければならない。

以前は「集団」と訳されていた所を、「軍団」と訳しています。そうです、主がこの奴隷の集団であるイスラエルを軍団とみなしておられます。主がイスラエルの為に、敵に戦われます。彼らを滅びから救われます。

そして、ここにおいても、「あなたがたは永遠の掟」と強調していますね。過越の祭りに直結している意味があるからです。

¹⁸ 最初の月の十四日の夕方から、その月の二十一日の夕方まで、種なしパンを食べる。¹⁹ 七日間はあなたがたの家にパン種があってはならない。すべてパン種の入ったものを食べる者は、寄留者でも、この国に生まれた者でも、イスラエルの会衆から断ち切られる。²⁰ あなたがたは、パン種の入ったものは、いっさい食べてはならない。どこでも、あなたがたが住む所では、種なしパンを食べなければならない。」

何度も、パン種の入ったものは決して食べてはならないと、神は命じておられます。そして、それを破るものならイスラエルの会衆から断ち切られると警告しておられます。この「断ち切る」は、神との契約から一切断ち切られること、つまり神の救いを失うのと等しいです。どうしてそこまで厳しい命令を神が与えられておられるのでしょうか？

それは、過越の祭りに示されている、神がキリストにおいて行われる贖いの業の結果を示しているからです。キリストが死んでくださり、罪が取り除かれました。それは、私たちが犯したいっさいの罪であり、私たちの良心は完全に清められたのです。

まず、コリント第一 5 章 7-8 節を読んでみましょう。「新しいこねた粉のままにいられるように、古いパン種をすっかり取り除きなさい。あなたがたは種なしパンなのですから。私たちの過越の子羊キリストは、すでに屠られたのです。ですから、古いパン種を用いたり、悪意と邪悪のパン種を用いたりしないで、誠実と真実の種なしパンで祭りをしようではありませんか。」ここで使徒パウロは、

パン種を罪ととらえています。わずかなパン種が粉全体を膨らますように、私たちが生活の中で罪を許すと、それが生活全体に影響を与えます。その形容からパン種は罪を表しています。その罪が、過越の子羊によって完全に取り除かれたことを示しています。

罪の一切が、子羊の血、キリストの流された血で取り除かれました。そして、それは永遠にそうなのです。主が、永遠に取り除かれたので、私たちは永遠に救われているのです。

3A 血に守られる家 21-28

1B 血を見て入らない裁き 21-24

²¹ それから、モーセはイスラエルの長老たちをみな呼び、彼らに言った。「さあ、羊をあなたがたの家族ごとに用意しなさい。そして過越のいけにえを屠りなさい。²² ヒソプの束を一つ取って、鉢の中の血に浸し、その鉢の中の血を鴨居と二本の門柱に塗り付けなさい。あなたがたは、朝までだれ一人、自分の家の戸口から出てはならない。

主の命令を聞いたモーセとアロンは、長老たちに今の命令を伝えています。「ヒソプ」は、中東で岩地に生い茂っている植物ですが、清めの儀式に用いられるようになります。そしてダビデがベテ・シェバと犯した罪のことで、このように祈っています。「詩篇 51:7 ヒソプで私の罪を除いてください。そうすれば私はきよくなります。私を洗ってください。そうすれば私は雪よりも白くなります」

²³ 主はエジプトを打つために行き巡られる。しかし、鴨居と二本の門柱にある血を見たら、主はその戸口を過ぎ越して、滅ぼす者があなたがたの家に入って打つことのないようにされる。²⁴ あなたがたはこのことを、あなたとあなたの子孫のための掟として永遠に守りなさい。

永遠に守るために、この信仰を継承させていかなければいけないということです。私たちにとっては、家族の中で、また教会として、そして周囲に対して信仰を伝えていくということです。

2B 子どもへの継承 25-28

²⁵ あなたがたは、主が約束どおりに与えてくださる地に入るとき、この儀式を守らなければならない。²⁶ あなたがたの子どもたちが『この儀式には、どういう意味があるのですか』と尋ねるとき、²⁷ あなたがたはこう答えなさい。『それは主の過越のいけにえだ。主がエジプトを打たれたとき、主はエジプトにいたイスラエルの子らの家を過ぎ越して、私たちの家々を救ってくださったのだ。』すると民はひざまずいて礼拝した。

過越の祭りを初めとするイスラエルの祭りは、子供に対する視聴覚教材になっています。その儀式の一つ一つの手順が、子供が「なんで？」と質問させるようになっているからです。その疑問に親が答えることによって、世代間で祭りを継承することができるようにされました。

28 こうしてイスラエルの子らは行って、それを行った。主がモーセとアロンに命じられたとおりに行った。

すばらしいです、彼らはモーセとアロンから聞いて、礼拝しました。これが、正しい応答です。それから、言われた通りに行いました。たとえイスラエルの民であっても、もし、礼拝してへりくだり、信仰によって従わなければ、救われませんでした。他のエジプト人と同じように、長子たちは死んでいきました。イスラエルの民だということが、自動的に保障しなかったのです。信仰による応答が必要でした。

みなさんは、どうでしょうか？キリストが流された血について、それを自分のこととして信仰をもって受け入れたでしょうか？これから聖餐にあずかります。

(ルカ 22 章 14-20 節を読む)

14 その時刻が来て、イエスは席に着かれ、使徒たちも一緒に座った。

15 イエスは彼らに言われた。「わたしは、苦しみを受ける前に、あなたがたと一緒にこの過越の食事をするのを、切に願っていました。

16 あなたがたに言います。過越が神の国において成就するまで、わたしが過越の食事をするのは、決してありません。」

17 そしてイエスは杯を取り、感謝の祈りをささげてから言われた。「これを取り、互いの間で分けて飲みなさい。

18 あなたがたに言います。今から神の国が来る時まで、わたしがぶどうの実からできた物を飲むことは、決してありません。」

19 それからパンを取り、感謝の祈りをささげた後これを裂き、弟子たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与えられる、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」

20 食事の後、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による、新しい契約です。